



園だより

12月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和7年11月28日発



「おおきなかぶ」

園長 佐藤 淳穂

いちご組で「おおきなかぶ」のエプロンシアターをしました。おじいさんの人形が登場すると、園庭から戻ってこないAさんも外靴を脱いで部屋に入ってきました。「おじいさんが種をまきました。あまいあまいかぶになあれ、おおきなおおきなかぶになあれ」子どもたちは保育室の前のプランターで赤かぶ（ラディッシュ）の種をまいたばかり。原作は「かぶをうえました」だったと思いますが、そこは体験を重ねられるようにと考えて「種」にアレンジしました。

「あまい、げんきのよい、とてつもなくおおきなかぶができました。」胸のポケットから緑色のかぶの葉をのぞかせると、子どもたちの目はエプロンシアターの畑にくぎ付けになりました。「うんとこしょ、どっこいしょ」掛け声を重ねながらBさんがかぶを抜く動作をすると、ほかの子どもたちも一斉にかぶを抜き始めました。「ところが、かぶはぬけません。」なかなか抜けない状況の、この一体感の楽しいことと言ったらありません。「おばあさんは…」私がエプロンの下のポケットから人形を出すのに手間取っていると、Cさんが「まご！」と言いました。Cさんはストーリーを知っていて、次に出てくる登場人物を予想しているのです。

「まごがおばあさんをひっぱって、おばあさんがおじいさんをひっぱって、」と3人の人形をエプロンに貼り付けると、「うんとこしょ、どっこいしょ」の元気な掛け声が響きます。その時です。次に出てくるはずの犬が登場する前に、猫の人形がポケットからはらりと落ちてしまいました。あってはならない失態に周りの大人が凍りついたこの瞬間、ずっとDさんが前に出てきて猫を拾い、私に渡してくれたのです。私は猫をポケットにしまうと「まごは、いぬをよんできました。」と犬の人形を出しました。

何事もなかったように話はすすみ、胸のポケットからは折りたたんであった大きなかぶが飛び出して大興奮のフィナーレとなりました。アクシデントに負けない原作の絵本の魅力の偉大さをあらためて感じました。繰り返される展開のおもしろさとリズムカルな言葉の妙…。何回も味わいたくなる物語の世界を友達と一緒に体験できるのは、園生活だからこその楽しみです。

読み聞かせは本に触れる経験を保障しながら、認知・非認知両面での豊かな育ちを支える大切な時間であると、東京大学名誉教授の秋田喜代美先生がお話をされています。印象的な言葉を声に出して楽しんだり、文脈から意味を推測したりすることで語彙の幅が広がり、言葉への感受性も育まれます。毎日の読み聞かせは年間の教育日数で約200冊となります。

今月のこども会では劇遊びもご覧いただきます。役になって楽しむお話の世界が豊かな時間となりますようご支援いただければ幸いです。